

公民館における子育て期の親の学びとその支援について③ —子育て当事者でありつつ地域の子育て支援活動の創り手へ—

宮 嶋 晴 子

九州女子短期大学 子ども健康学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2024年6月25日受付、2024年7月11日受理)

要 旨

本稿の「公民館における子育て期の親の学びとその支援について③—子育て当事者でありつつ地域の子育て支援活動の創り手へ—」は、2022年にまとめた「公民館における子育て期の親の学びとその支援について①—家から一步を踏み出し子育て主体として成長することを支える講座づくり—」、2023年にまとめた「公民館における子育て期の親の学びとその支援について②—子育て講座の参加者から子育てサークルの担い手へ—」の続編である。①②の論文では、公民館講座に参加していた乳幼児を持つ親たちが、公民館職員の後押しによって子育て自主サークルを立ち上げ地域と関わりながら子育てに取り組むことによって、孤立の子育てから地域ぐるみの子育てになり、より充実した子育てを営むことが出来ていたことをあきらかにした。そこで本稿では、引き続き同じ公民館実践事例をもとに、地域参加により充実した子育てを営む主体としての子育て当事者たちが、公民館の講座や子育てサークルに継続して参加していくことによって、地域の活動に参加・参画する経験を経て、地域の子育て支援の活動の創り手、すなわち地域を創る主体としての形成過程をあきらかにした。

キーワード 親の主体的な学び 子育てを営む主体としての学び 地域を創る主体としての学び

1. 背景と問題意識—「教育の論理」から子育て支援実践を考える—

1989（平成元）年の平成初め「1.57ショック」からはじまったわが国の子育て支援は、30年以上に渡って、様々な法制度による子育て支援サービスの拡充に取り組んで来た。しかし、令和の時代に入った現在、少子化問題、虐待問題、親の孤立や不安の子育ての問題、子どもの育ちの問題など、それらの問題にほとんど歯止めがかからない、むしろ悪化の状況を辿っている。子育て支援施策の多くが支援という名のサービス、すなわち「福祉の論理」から施策が実施されてきたと考えるならば、この30年を振り返り、今一度、「教育の論理」から子育て支援をとらえ直していく必要性に迫られているのではないだろうか。

そのような状況の中、2023（令和5）年4月に「こども家庭庁」が新設され、「こども施策」の一つとして「子育て支援」の再定義がなされた。同年4月1日に施行された「こども基本法」、また同年12月に策定された「こども大綱」¹においては、「子ども施策に関する重要事項」の柱の一つに「子育て当事者への支援」が示されている。具体的には、①経済的支援、②地域子育て支援・家庭教育支援、③共働き・共育ての推進、④ひとり親家庭の支援とある。それらの内容を見る限り、これまでの子育て支援施策と同様、「福祉の原理」による「サービス支援」の流れを引き継ぐものであることがわかる。唯一、「②地域子育て支援・家庭教育支援」に「教育の論理」が近いと思われるものの、詳細を見ると「寄り添いながら」と受容の視点はありつつも、「親への子育て知識やスキルの啓発」という親を客体として指導、評価するという観点からの教育に留まり、親自身が主体的に子育てを通して、学び、成長していくという主体としての形成という「教育の論理」の視点は盛り込まれていないと考える。

そこで、あらためて親自身が子育てを通して、主体的に学び、成長していく実践の事例を研究し、現代の子育て支援施策に加えるべき視点をあきらかにしていくことが課題ではないかと考えた。

そこで、本稿に至る2つの研究を概観する。まず一つ目の「公民館における子育て期の親の学びとその支援について①—家から一步を踏み出し子育て主体として成長することを支える講座づくり—」では、乳幼児期の子育てを行う親たちが、支援者等の後押しを受けて家から一步を踏み出し、地域の公民館の子育て講座

で学びのスタートラインに立ったこと、そしてそこに継続して参加し、子育て主体として成長していくプロセスをとらえていった。具体的には公民館職員が工夫して作った「公民館だより」が幼児とその親が家から一歩を踏み出し公民館の講座に誘うことを可能にさせ、さらにその公民館主催の「子育て講座」の「講座内容」の内容と、「人とかかわり」の仕組みをちりばめ実施していったことによって、そこに継続参加した親たちの子育て主体として成長する姿を見ることが出来た。すなわち、地域参加による、学びの第1段階「はじめの一歩を踏み出す」、第2段階「人と語り合う」という観点からとらえていった。

さらに、その次の段階として、「公民館における子育て期の親の学びとその支援について②—子育て講座の参加者から子育てサークルの担い手へ—」では、子育てを営む主体としての学びとともに地域を創る主体としてのプロセスをたどり、その支援の在り方をとらえていった。具体的には、公民館主催の「子育て講座」で大切にしていた「語り合い」と「ともにつくる」に継続して参加し続けた子育て当事者たちの中に、主体的参加の気運が生まれ、新たな実践が生まれていった事例を捉えていった。公民館講座の内容についての質問(クリスマス会の開催の有無についての問い合わせ)にきた親たちに対し、公務員職員Kさんは親自ら活動をつくっていく意思表示の一つととらえ、「自分たちで活動をつくる」ことを提案、すなわち、「親子のやりたい」気持ちを引き出し、関係の深まってきた仲間をつなぐタイミングを見て、自主活動を提案し、その活動を行っていくための会場や備品などの後方支援にフェードアウトしていく支援を展開していたのである。そこには、第1段階、第2段階に続き、子育てを営む主体としての充実した公民館での学びの中に、地域を創る主体になっていく展開があった。また、そこにはタイミングを見計らって後押しするきめ細やかな公民館職員の支援がなされていた。

それら前段の公民館実践研究に見る次なる展開をとらえていくのが第3報としての本稿の研究課題である。

そこには、子育て支援施策に足りない「教育の論理」の考え方、すなわち子育て期に親が主体的に学び、育つという学習主体形成のヒントが見えてくるのではないかと考える。

2. 研究の目的

そこで本稿では、前段の第1報、第2報に続き、第3報としてある公民館実践の事例をもとに「公民館における子育て期の親の学びとその支援について③—子育て当事者でありつつ地域の子育て支援活動の創り手へ—」をあきらかにしていく。具体的には、子育て当事者が自身の子育ての主体としての成長とともに、どのように地域を創る主体としての展開を拓げ、子育て当事者でありつつ子育て支援活動の創り手となっていくのか、その経緯と実践の内容をあきらかにするとともに、公民館職員Kさんによるどのような支援がなされていたのかについてもとらえていく。さらに、その地域を創る主体としての展開が、子育て当事者である親たちにおいて、わが子の子育てにどのような影響を及ぼしていたのか、ということにも着目して事例の考察を試みたい。

3. 研究の方法

本稿では、前段の研究でも取り組んだ公民館における子育て期の親の学びとその支援をとらえていくため、福岡県内にある一つの条例公民館の事業について、内容、職員のかかわり、親の学びについて、資料や聞き取り調査をもとに事例の分析を試みる。具体的には、この公民館が2009年から取り組んだ「子育てサポーター講座」の記録²とともに、その講座を受講した子育て自主サークルの親たちが、子育て支援グループを立ち上げていくプロセスについて記録された親Tさんの活動ノート³、聞き取り⁴、また公民館職員として「子育てサポーター講座」を企画、実行してきた公民館職員Kさんの活動記録⁵や聞き取り⁶等の分析からあきらかにしていきたい。

なお、本稿で使用している調査結果や資料については、学内の研究倫理審査を受理し、個人情報保護を厳守して取扱うとともに、関係者に研究で取り扱うとの説明を行い、承諾を得ている。また、公開する際には、地域や個人が特定されないよう、市町村や公民館名、個人の氏名等はすべて匿名として個人情報とプライバシーの保護を徹底した。

4. 結果と分析①—子育て支援グループの組織化の契機—

(1) 「託児で泣いている子どもの姿」を見ての公民館職員としての思い

毎月2回行われている公民館主催の子育て講座では、内容によって子どもを託児に預けて受講する活動があった。乳幼児の子どもたちは別室で外注した託児ワーカーズに託児をされていたものの、託児の経験の少ない乳幼児たちには、親と離れ、また普段とは違う人と過ごすことへの不安なのか、泣いたり、なじめなかったりする様子が多く見られた。さらに、預けた乳幼児の親から、「子どもが可哀そうなので、託児がある講座はしばらくやめておきます。」というつぶやきが聞かれ、託児付き講座を躊躇する気持ちになっていることを感じていた。

公民館職員Kさんは、自らの子育て経験からも同じような状況で親子分離の際に子どもが泣く経験をしてきたこともあり、まだ慣れていない状況での乳幼児が知らない人へ預けられることへの不安な気持ち、また泣かれた親は後ろ髪をひかれるような、またここまでして学ぶ必要があるのかという罪悪感のような気持ちが実感でき、「子どもの不安を解消することが出来ないだろうか。」と考え始めるようになっていた。

(2) 子育て当事者の「わが子が入園しても公民館にかかわりたい」思いからの組織化

公民館職員Kさんは、この時期、前述した託児で泣く子どもたちをどうにかしてあげたいという思いを持ちながら、子育てサークル活動3年目を迎え、幼稚園に入園した子どもたちがいることを念頭に置きつつ、子育てサークル活動を見守っていった状況があった。

その同じ頃、子育てサークルのメンバーの「子どもが幼稚園に入園して、昼間一人でごはんを食べるのがさみしい」というつぶやきを聞いた。それは、親子で家から一歩を踏み出し、公民館講座を契機に地域に参加、参画したことで、学びや出会いにより充実した毎日だったからこそ感じる寂しさであったと考えられる。

そこで、公民館職員Kさんは、子育てサークルに参画している中心メンバーを見て、「(子育てサークル活動を通して) 親同士のつながりも出来、保育士資格を持っている人もいる。このメンバーだったら子育て中の親子にあたたかく寄り添い、支える支援者になるのではないだろうか。地域の中で子育ての相互扶助が継続して行われるためのグループの立ち上げが、今だったら出来るのではないだろうか。」と考えるようになったという。このように公民館職員Kさんは、子育てサークルの中心メンバーが、自分と同じく託児で困っている仲間の親子の状況に胸を痛めていたことも感じていたため、子どもの年齢により子育て講座を卒業しても、支援者として子育て講座に関わることが出来ると考え、子育て支援グループの組織化の後押しするのは「今だ」と確信していたのであった。

5. 結果と分析②—子育てサポーター講座を経て子育て支援グループ発足へ—

(1) 子育てサポーター講座の開催

そこで公民館職員Kさんは、子育て支援をするためには、これまでの子育て当事者としての学びに加えて、支援活動をしていくための専門の学びも必要であると考え、「子育てサポーター講座」を実施することにし、館内の段取りを整え、全5回の内容を計画していった。

公民館職員Kさんは子育てサポーター講座を計画する際、子育て支援グループの組織化を視野に入れていたことから、「一般的なことを学ぶより、グループを立ち上げること、立ち上げたあとの活動にすぐに役立つ内容を重視した内容にしよう。」との考えで組み立てていた。さらに、この講座を受講する対象者については、あえて一般に広く広報することを積極的にしないという方向で実施を試みた。そこには、学びを特定の人に制限するというのではなく、最初の立ち上げ支援の講座では、核となる人が方向性を共有していくことが必要のため、第1回目の「子育てサポーター講座」は、問題意識を共有しているメンバーで実施し、立ち上げ後に、その活動の賛同者を含めて実施していく講座に展開したいという思いがあった。

「子育てサポーター講座」の内容は、「図表1」にあるように、第1回「子育て支援に必要なもの」では、地域参加による親の育ち支援がいかに大切なのかという内容から始まった。ここでは、受講したメンバー自らが地域の公民館講座に参加して学びや出会いを実感していたことから、地域に親子が参加していくための子育て支援の必要性を強く実感していった。続いて、第2回「子どもへのまなざし、接し方」では、同じ目

線で子どもを見つめ、子どもの権利を尊重したり、主体性を引き出したりする関わり的重要性をあらためて確認する学びとなった。さらに、第3回「子育てサポーターとしての実践から」では、実際に他地域で子育て当事者が子育て支援グループを立ち上げ実践している話を聞くことによって、当事者だからこそ大切にしている思いから活動内容が創られていることを知り、自分たちが立ち上げた時の具体的なイメージを持てる内容となっていた。そして、第4回「安全および救急講習」では、立場的には支援者側という立ち位置が出てくることによって、これまで以上に、安全や救急対応についての責任が伴ってくるという側面も増えていくことから、そのスキルをあらためて身に付けるための講座として盛り込まれた。これは支援者としても大切なスキルであるとともに、子育て当事者としてもわが子へのリスクマネジメントにもなっていた。

最終回の第5回は、「託児実習」という内容だった。第1回から第4回までの学びを踏まえ、実際託児をするという体験に取り組んでいった。ここでは、これまでの預ける立場の子育て当事者という立ち位置から見えていた景色と、親が学んでいる間、わが子以外の子どもの学びを保障する立場というこれまでとは違う立ち位置から見える景色が違うことをあらためて実感する実習となっていた。「私」のより良い子育てから、「私たち」のより良い子育てを目指したいという、主語が複数形になる経験をともなっていた。

さらに、実習後、子育て支援グループ立ち上げに向けた話し合いを行っていった。そこでは、これまでの子育て当事者として関わってきた公民館講座が、子育て当事者でありつつ、その学びを支援する立ち位置が加わることによって、さらに学びが広がったことを実感していた。

(2) 子育てサポーター講座修了生が話し合い立ち上げた「子育てサポートA」の活動内容

このような子育てサポーター講座を修了した5人は、あらためて地域で乳幼児親子が学ぶ場や機会の重要性とともに、前述したエピソード、託児で泣く子どもの問題を解決していくためにも、子育て当事者である自分たちが行う子育て支援活動が必要でありその担い手になりたいという思いを強くしていった。そこで6人（公民館職員Kさんも一支援者として加わり）で会発足に向けて話し合いを行っていった。あえて公民館職員Kさんがメンバーの一人として加わったのは、「公民館職員として支援する段階を終え、同じ問題意識を持った支援者の一人として対等に位置づきともに活動する仲間として支援活動に関わることが、自然の関わりであると考えたから」という。このメンバー6人は、活動・規約・役割・運営方法についての話し合いを重ね、2010年4月に子育て支援グループ「子育てサポートA（仮称）」を発足させた。

この会の活動特徴は2つある。一つは、規約にも書かれた「第2条 目的」である。「この会は、地域における子育てサポート活動を行うことを目的とし、安心して楽しく子育てが行える地域づくりを目指す。」である。ここには、子育て支援サービスを行う支援活動ではなく、地域における活動への参加を前提にそこでの支援を行うというスタンスが大切にされている。二つ目は、同じく規約「第7条 活動」の一つ目の柱「子育てサポート」のもう一つの柱である「会員相互の情報交換および研修」ある。子育てサポーター講座を経て支援活動を始めたメンバーがそれ以降、毎年「図表2」にある研修での学びを継続しており、会発足14年となる現在においても、新しい入会者はもちろん、メンバー全員が常にその学びへの位置づけを大切に活動しているのである。ただ公民館主催として出来る状況は、予算的に、その時の職員の価値観によって変わっていくため、その講座内容の趣旨を引き継いでいる地域の子育て支援の講座、例えば、社会福祉協議会の研修にリンクしたり、また「子育てサポートA」が自ら主催事業として実施したりするなど、柔軟に学びの機

図表1 第1回子育てサポーター講座

実施年月
2009年度（2010年1月15日～2月9日）
主催
公民館
対象
子育てサークル中心メンバー 5人
内容 回 「テーマ」（講師）
第1回：「子育て支援に必要なもの」 （研究者+子育て支援団体代表）
第2回：「子どもへのまなざし、接し方」 （保育園園長）
第3回：「子育てサポーターとしての実践から」 （他地域の子育て支援グループ代表など）
第4回：「安全および救急講習」 （市の保健師）
第5回：「託児実習」（※実際の講座の託児を体験）

会を連携、また自ら創り出している工夫もみられる。

図表2 子育て支援者を養成、またスキルアップするための講座について

①実施年、②主催、③回数	内容（テーマ例）
① 2009年～2012年 ② A公民館 ③ 各年5～6回講座	○親育ち支援の視点：「子育て支援で大切にしたいこと」 「寄り添う視点」 「子育てを通しての地域参画」 ○支援スキルの向上：「コミュニケーション①聴く②伝える③実習」 ○子育て支援の視点
① 2013～2024年 （現在に至る） ② B町社会福祉協議会 ③ 各年5回講座	・子ども理解：「子どもへのまなざし、接し方」「子どもとの関わり方」 ・あそびの実践と意義理解：「おもちゃ、あそびの大切さ」 「プレーパーク」 「外遊びの大切さ」 ○危機管理・安全管理：「救急講習」
① 2023～2024年 （現在に至る） ② 「子育てサポートA」 ③ 各年5回講座	「AEDの使い方～子どもの命を守る～」 「リスクマネジメント」 ○実践紹介や実践交流：「他の市町の子育て支援団体」 「子育てサポートA」 ○話し合い：「今後について」

さらに、「図表3」では、この発足メンバーがどのようなプロセスを経て、支援グループを立ち上げるに至ったのかを整理している。そこでは、公民館主催の子育て講座に参加し、自主活動としての子育てサークル活動に参画、さらに、公民館主催の子育てサポーター講座を受講して、自主活動としての子育て支援グループの立ち上げメンバーとして位置づいている。最初は、参加者として地域に参加していったレベルから地域活動の参画者として展開していったことにより、「私」個人の子育て課題の解決に向けた活動参加から、「私たち」すなわち、地域や社会の子育て課題の解決に向けた活動への主体としての形成がなされていることがわかる。さらに、公民館主催事業という側面からみると、自主活動を展開する前段には、必ず公民館の主催講座が位置づけられ、自主活動が誕生していることがわかる。

図表3 公民館の主催講座と子育て自主グループ誕生の内容と経年の一覧

	1997 (H9) 年度～	2005 (H17) 年度	2006 (H18) 年度	2007 (H19) 年度	2008 (H20) 年度	2009 (H21) 年度	2010 (H22) 年度～
【自主活動】子育て支援グループ							
【公民館主催】子育てサポーター講座							
【自主活動】子育てサークル							
【公民館主催】子育て講座							

6. 結果と分析③

－自主的な子育て支援活動とともに公的な子育て支援活動も受託へ－

(1) 子育て支援グループ「子育てサポートA（仮称）」の活動内容

話し合いを重ね、発足時、当面の会の活動は、公民館の「子育て講座の託児」を行うこと、「プレーパークの活動支援」を行うことの二つの活動に取り組んでいくことが決められた。なぜその2つが決められたの

か。一つ目の「子育て講座の託児」では、前述したエピソードの親子の不安をなくしたいという問題意識から始まった子育て支援グループの立ち上げであったことから、それがまず活動の最初の柱に位置づいた。さらにメンバーたちは、その託児活動を、「“親が（子どもと離れ）学習”するときの別室で託児」と「“親子で活動”するときの同室で見守りの託児」という、親の学び、親子の活動が最大限、不安ではなく楽しく充実した学びになるような支援を目指し、2つの託児のやり方として展開していった。また、二つ目の「プレーパークの活動支援」については、メディアが蔓延した現代社会における乳幼児期の外遊びの重要性を学んできたメンバーが、子どもが自分の責任で自由に遊ぶ「プレーパーク」という実践がとても大事であることを子育て講座や子育てサークル活動で学び実践してきたことから、そのプレーパーク実践をさらに充実発展させていくための活動を二つ目に位置付けた。具体的には、外遊びを一緒に楽しみつづ、道具を準備したり、場のリスク管理をしたり、遊びを展開させるプレーワーカーとしての役割を果たすという、「ともに」場をつくっていく活動である。

子育て講座の託児支援を始めてすぐに、託児を不安がっていた親子から、「一緒に活動してきた子育て仲間が、支援者として子どもを見てくれることにより託児が不安ではなく安心に変わっていった」という声が聞かれ、「子育てサポートA」のメンバーはその活動の意義をすぐ感じていくことが出来たという。公民館職員Kさんも、「こんな声を聞くたびに、地域の子育て環境が良くなるということは、こういうことの積み重ねなんだ、を実感する。」と話した。まさに、子育て当事者が支援して欲しいことを、支援者性を内包させた子育て当事者が応援していくことが、地域の子育て環境を良くする実践になっていることがわかる。

(2) 公的な事業受託としての「子育て支援センター」運営の活動内容

2010年4月に発足した「子育てサポートA」は、2024年現在、15年目の活動に突入している。その間の大きな出来事として、発足3年目の2013年4月より、活動の一つとして、市子育て支援センターの一カ所の事業運営を受託し、活動しはじめたことだった。

この受託は、前年度に自治体から子育て支援センターを委託する団体公募があり、申請団体が「団体紹介とともに運営内容や方法について」プレゼンテーションし、選ばれるという「プロポーザル方式」がとられ、それを受けての決定であった。公民館職員Kさんがこの情報を「子育てサポートA」のメンバーたちに伝えると、その申請をするかどうか、またこれまでの活動のふりかえり、もし子育て支援センターを受託したらどんな子育て支援を行い、何に取り組むのか、という話し合いを何度も重ねた。そして、最終的に、「子育てサポートA」の活動の一つとして、同じ地域の公的な子育て支援センターの事業運営にも新たにチャレンジしてみようと申請を決意し、書類の作成やプレゼンテーションの準備を進めていった。

2013年2月に行われた申請団体のプレゼンテーションで用いた「子育て支援センター事業受託プロポーザル提案書⁷」では、「活動に対する思い」にどのようなスタンスで、公的な子育て支援事業を担っていきたくのかという記述がある。具体的には、「メンバー自身が、公民館の子育て講座や子育てサークルに参加しながら地域で子育てをしてきた経験を活かし、」という前提を示しつつ、「子育て中の親が地域のつながりの中で、安心して、自信を持って、楽しく子育てができるよう、同じ地域で子育てをする先輩、仲間としてサポートすること、を大切に活動が続けている」とあった。自身の公民館における学びの段階を踏まえつつ「同じ地域で子育てする先輩、仲間として」という発足の原点の思いを基盤に、公的な子育て支援を担っていく意思表示がなされていることがわかる。

さらに同じく、提案書に見る「申請の理由」では、「親の地域参加の段階を上がってきた『子育てサポートA』のメンバーだからこそ、後に続く子育て中の親子に働きかけ、後押しをし、同じように段階を上る支援ができる。1人1人の親が、自分らしく充実した子育て期を過ごし、子どもを豊かに育てることができるのはもちろんのこと、長い目で見ると子育てに優しいまちづくりの実践にも貢献できる。さらに、「これまで培ってきたXX公民館やXX地区社会福祉協議会、読み聞かせを始めとした各種ボランティア団体との連携力を活かせる。」とある。子育て当事者自身が地域に参加し、そこでの学びや出会いによって、現在の自身の子育てや子どもの育ちの豊かさとともに活動に意義を感じている自己充実があるからこそ、次の親への支援、すなわち他者支援や地域・社会への貢献という展開に至っていることがわかる。また、その中で、出会っ

た人やグループ、団体と連携して、地域の子育て環境を良くするための取り組むこと、すなわちネットワークの広がりや深まりを見ることが出来た。

子育て支援センター事業受託後の取り組みは、2024年現在12年目を迎えている。しかし、その子育て支援センターの事業は、あくまでも「子育てサポートA」の自主活動の一つの活動に位置付けられ現在に至り活動が展開されている。「図表4」の資料では、基本的な活動の柱は会発足時の自主活動の2つの柱をベースに15年に渡って、活動を継続し、充実してきた展開であることがわかる。そして、その蓄積を活用しながら充実した子育て支援センターが運営されていることがわかる。さらに、「子育てサポートA」では、2023年より、あらためて子育て支援センターでは出来ない親子の居場所づくり活動に取り組み始めている。具体的には、公的機関には責任の所在が明確なため、支援する側と支援される側という境界線をひかざるを得ない。しかしその境目を越えた対等な場づくりや人のつながりの重要性を実感し、私的な子育て支援活動としてあらたに立ち上げていく必要性を実感していたのである。それらの展開は、公的な子育て支援に関わってきたことによって、あらためて公的な子育て支援の充実を図るとともに私的な子育て支援活動の再評価をしていると考えられる。

7. 考察

最後に、本稿のテーマである「公民館における子育て期の親の学びとその支援について③－子育て当事者でありつつ地域の子育て支援活動の創り手へ－」の考察を行う。

まず子育て支援グループの組織化の契機は、公民館の子育て講座で「託児で泣いている子ども」を見て問題意識を持った公民館職員Kさんが、親の地域参加、参画したことによる学びの成果を活かせないかと考え、子どもが入園した後の子育て当事者が「わが子が入園しても公民館にかかわりたい」というタイミングも加わり、子育て当事者に支援者性が内包されている状況が生まれ、訪れたものであった。

そして、公民館では、受講対象者を子育てサークルの中心メンバーに定め、子育て当事者が求めている子育て支援について学び、考える「子育てサポーター講座」を実施していった。それらの講座を受講した子育てサークルの中心メンバーは、修了後、話し合いを何度も重ね、会の目的から活動まですべての運営について一つ一つ取り決めを考えていき、「活動内容」においては、子育て支援サービスを行う支援活動、すなわち「福祉の論理」の支援ではなく、「教育の論理」としての地域における活動への参加を応援するという視点を大切にしており、それが規約にも明記されていた。まさに、公民館で「教育の論理」の学びの活動に参加、参画した親たちが、今度は「教育の論理」を大切にしたい地域の子育て支援の活動を創り出していく担い手になっていたのである。

その子育て支援の担い手となった子育て当事者たちは、「研修」という学びの場や機会を毎年位置付けていくことも欠かさなかった。ここには、子育て講座から子育てサークルでの学びの蓄積が支援者となっても基盤に据えられていることがわかる。その地域参加、参画による学びの継続した展開は、親自身の子育てを営む主体としての成長や充実の実感が前提となっていたことは言うまでもない。

その学びや活動の成果は、自主活動として子育てサークルを運営していくことも地域を創る主体としての展開であったが、さらにここでは、公民館主催の子育てサポーター講座を経て、子育て支援の組織化を担うというさらなる地域を創る主体としての展開を広げていたことがわかった。

最後は、自主活動としての「子育てサポートA」が、私的な子育て支援事業の活動とともに、公的な事業を

図表4 「子育てサポートA」の活動（2024年現在）

- 公的な地域の子育て支援事業
 - 子育て支援センター事業運営（2013年～現在）
- 私的な地域の子育て支援事業
 - 公民館講座における託児・同室見守り
（※現在は交流センターに名称変更）
 - 地域の子育てサークルの見守り託児
 - プレーパーク運営
 - 要請に応じて他の交流センターや団体の託児、プレーパーク運営・支援
 - 障がい児・者のさわやかスポーツ大会サポート
 - 親子の居場所活動「○○んち（仮称）」の開催
 - XX地域の住民（子ども含む）による
実行委員会方式「XXXマルシェ」の開催

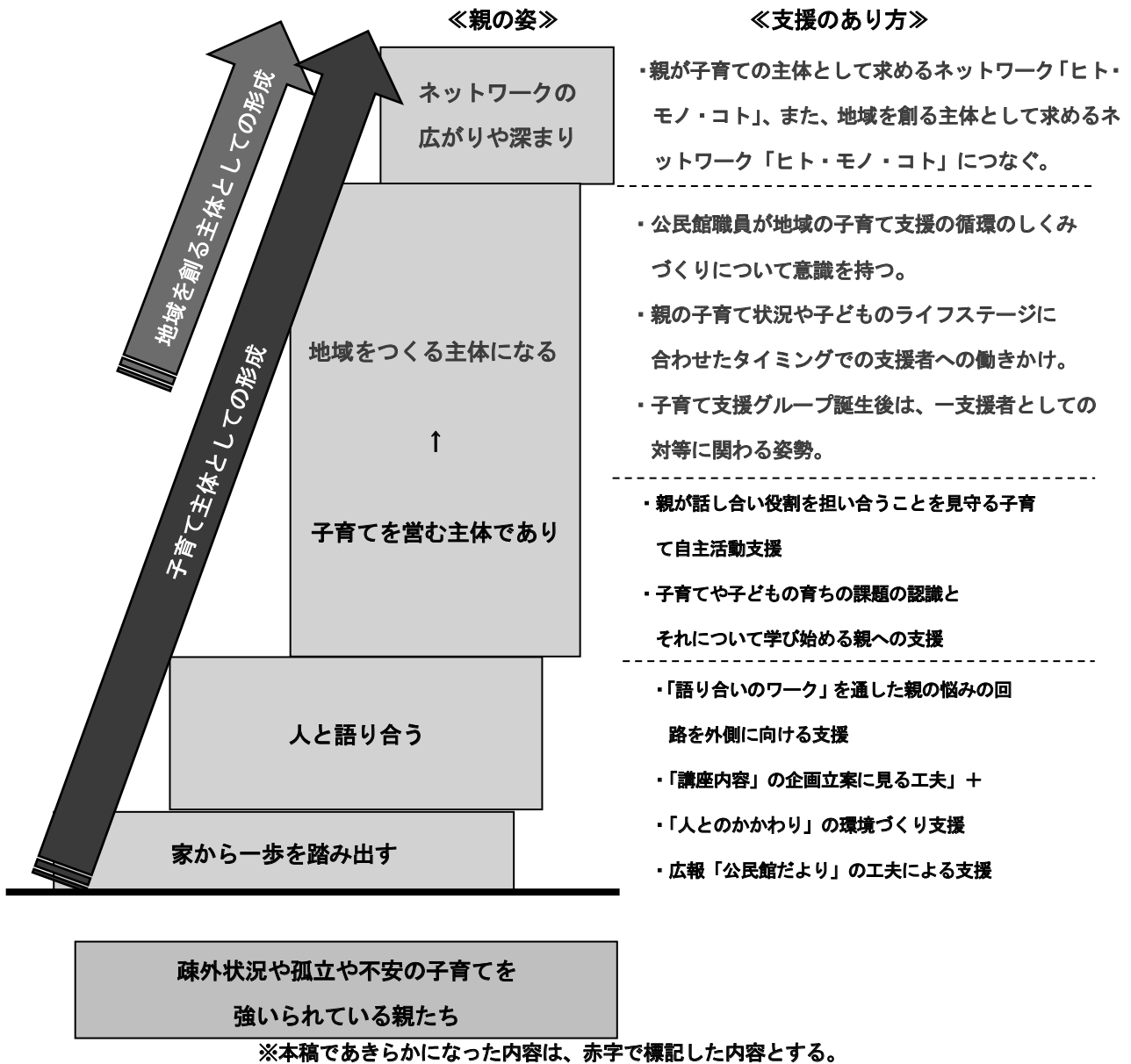
受託して子育て支援センターを運営する活動の展開も見られていた。一方で子育て支援センター事業受託11年が経過した2023年から、公的な子育て支援事業ではなく、あえて私的な子育て支援事業でしか出来ない事業への気づきを認識する状況も見られている。それは、公的な活動を取り組んだからこそ見えてきた視点であることがわかる。すなわち、活動を通じて、ネットワークの広がりや深まりがなされ、活動を振り返り、再評価することによって、私的な自主活動の意義と公的な子育て支援センターでの事業の両方の意義が見え、活動を展開させていることがわかる。

最後に、この考察内容を、「図表5」の「公民館における子育て期の学びとその支援についての概念図」に位置づけて整理を行う。

「親の姿」では、乳幼児を育てる親が公民館講座の参加を契機に、子育てサークルに参加、参画していく地域を創る主体の段階に展開した後、あらためて公民館が子育てサポーター講座という学びの場を設定することによって、子育て支援活動の担い手になる段階に進む展開が見られていた。そこで学んだ子育てサークルメンバーは、自分やわが子がよりよく過ごしたいという<私>という個人的欲求を満たす視点、すなわち子育て主体とともに、自分以外の他者も含む視点<私たち>という社会的欲求、すなわち、子育てや子どもの育ちを支える仲間でもありたいという視点が内包され、仲間とともに社会的な欲求を満たしていく主体になりたいという意識の芽生え、それを目指した行動の変容という地域を創る主体としての形成がなされていた。その子育て主体と地域を創る主体という形成が見られた親たちには、さらにそれぞれの主体としてのネットワークの広がりや深まりが見られ、さらなる子育てを営む主体としての充実、また、新たな実践を創り出す主体としての広がりや深まりの展開を見せていた。

「支援のあり方」からとらえると、公民館職員Kさんが地域で子育て支援が出来る循環のしくみへの意識を持ちながら、親の地域活動における「私」から「私たち」として地域を創る主体の意識の芽生えのタイミングをとらえ、そこに、「子育てサポーター講座」を位置づけ、主体来な子育て支援の担い手とその組織化の後押しをしていた。そして、その組織化に至った後は、職員という学びを支援する人、学習者という支援される人の関係性を越えた、人としての対等な関係性に移行している姿があり、公民館職員Kさんの、地域づくり、人づくりのスタンスが現れていた。そして、本稿では十分論じ切れていないが、ネットワークの広がりや深まりにおいても、子育て主体として地域を創る主体として親が求める「ヒト・モノ・コト」を紹介したり、出合わせていく役割を担い、さらなる主体形成を支える支援のあり方を見ることが出来た。

図表5 公民館における子育て期の親の学びとその支援についての概念図



¹⁾ こども家庭庁「こども大綱」2023年12月22日、閲覧日2024年5月5日

<https://www.cfa.go.jp/f>

²⁾ XX公民館「子育て講座の年間プログラム」2005～2012年

³⁾ 親Tさんが記録した子育てサークルの活動ノート、2007～2012年

⁴⁾ 親Tさんへのインタビュー、2023年3月11日

⁵⁾ 公民館職員Kさんへのインタビュー、2023年3月11日

⁶⁾ 公民館職員Kさんの活動記録メモ、2005～2012年

⁷⁾ XX市「XX子育て支援センター事業運営委託プロポーザル提案書」2013年2月

Community Centers' Educational Value for Parents with Children and Types of Support (3)

-How Parents with Children Become Initiators of Local Childcare Support-

Haruko MIYAJIMA

Department of Childhood Care and Education, Kyushu Woman's Junior College

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

(Received June 25, 2024, Accepted July 11, 2024)

Abstract

This paper is a sequel to “Community Centers ‘Educational Value for Parents with Children and Types of Support (2)- How Learners in Parenting Classes Become Organizers of Parenting Circles” written in 2023 and “Community Centers’ Educational Value for Parents with Children and Types of Support (1) - Designing classes that encourage parents to become empowered child-rearing agents-” written in 2022. In papers (1) and (2), the parents of young children who participated in community center classes launched a parenting circle with the support of community center staff and engaged in raising children while also engaging with their local community. Instead of raising children alone, they began to raise children as a community, and the results show that these parents were able to raise their children in a more fulfilling way. In this paper, based on the same case study of a community center, we examine the same parents who experience fulfilling parenting activities through their continuous participation in community center lectures and child-rearing circles. This paper clarifies the process through which their experience of involvement and participation in local activities shapes them into initiators of local child-rearing support activities, i.e. community-building activities.

Key words : Proactive learning by parents Learning as a parenting entity Learning as a community-building entity